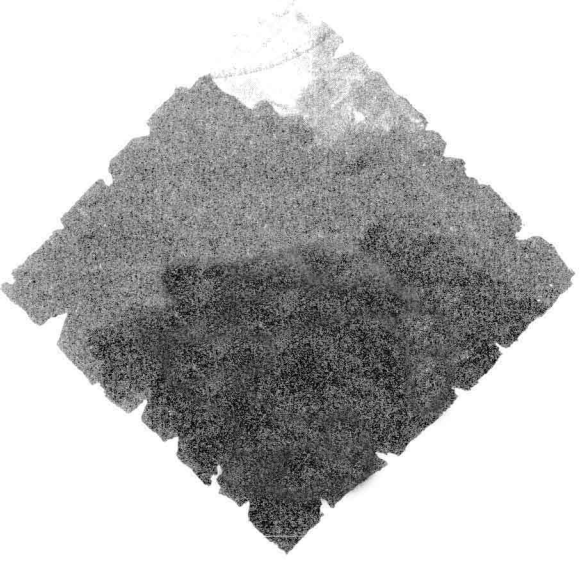
五木寛之



新潮社版

にっぽん三銃士（さんじゅうし） 上巻

一九七一年七月五日 発行
一九七三年六月五日 一八刷

定価五五〇円

著者 五木（いつき） 寛之（ひろゆき）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(260)一一一一(大代)
振替東京八〇八番

（乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・株式会社金羊社 製本・新宿加藤製本所
© Hiroyuki Itsuki 1971 Printed in Japan

にっぽん三銃士　上巻　目次

羊が怒るとき　7
哀しき狼　18
迷えるロバ　30
おさらば東京　58
自由をわれらに　80
博多小女郎浪枕　95
那珂川ブルース　113
可愛い女　144

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人生の並木路 163
男のエレジー 175
ゲリラと水虫 194
巨象とボウフラ 219
屋上のジャンヌ 238
極秘抵抗作戦 254
福岡秋の陣 268

装幀　村上　豊

にっぽん三銃士　上巻

羊が怒るとき

風見一郎は、その日、怒り狂っていた。
もっとも表面では、そうは見えない。彼は怒りや悲しみを顔に出すほうではなかった。無表情に、やや目を伏せて、ぼんやり押し黙っているだけである。
「はっきりしない人ね」
と、恋人の江草千夏は、一郎のそんな態度をいつもじれったがっていた。
「怒ってるのか、悲しんでるのか、楽しんでるのか、わかりゃしない。変な顔」
たしかに押し黙っている時の風見一郎の表情には、はっきりしない感じが漂っていた。ちょっと見ると、朝起きがけに自分の指で自分の欲望を解放し終えたあとの少年の、あのうつろな顔つきのようでもあり、競馬場で風に舞う馬券をぼんやり眺めている不運な男の横顔のようにも見える。
だが、実はそんな時、一郎は猛烈に怒っているのだ。
〈殺してやろうか〉
と、内心では思っている。
だが、例えば今日、会社で一郎を叱責した森川副部長や、その年代の連中の目から見ると、そうは見えないらしい。
一メートル八十センチの長身と、思い切りのびた長い手脚さえ、彼らの目には軽蔑の対象としてしか映じないのだ。見上げるような背の高い青年が、笑っているような、はにかんでいるような目で、抗議もせずに押し黙っている姿は、いっそう頼りなく感じられるのだろう。
「きん玉はあるのか、きん玉は！」
と、森川副部長はどなったのだ。
その時、一郎はぼんやり窓の外の空を眺めていた。スモッグのせいで灰色にくすんだ春の空には、時代おくれのアドバルーンが一つ、空っぽのきん玉のように浮んでいた。
「どうなんだ、おい！」
と、森川副部長は叫んだ。猛烈社員、と異名をとどろかせている男である。もっとも、その異名は本人が自分でほうぼうに流したものだという噂もある。
「はあ」
と、一郎は左手でズボンの前をさぐって、あいまいな返事をした。
「あるのか、ないのか、きん玉は」
「あるようです」
「ばか！」

殺してやろうか、と思ったのはその時だった。だが、一郎はいつものようにはっきりしない顔で、ぼんやり窓の外へ目をやっただけのようである。

「もういい。行き給え」

と、森川副部長は言ったのだ。一郎はひょいと頭をさげて自分のデスクへもどって行った。

「図体ばかりでかくなりやがって」

と、森川副部長が背後で言っているのがきこえた。「本気で怒ることさえ忘れてしまってるんだ。最近はヒツジみたいな青年ばかり多くなったよ」

殺すか、あいつを、と一郎はその時ふたたび思ったのだった。

〈今日はまっすぐ帰ろう〉

と、風見一郎は満員の地下鉄の中で、自分に言いきかせた。

〈ネスパのつけがたまり過ぎている〉

まだ月なかばというのに、今月はすでに十回以上あの店に顔を出している。日曜は休みだから、ほとんど毎日寄っているわけだ。

〈べつにいい女がいるわけでもないのに〉

なぜおれは毎晩、ネスパに寄るのだろう、と、一郎は考えた。

酒が好きというわけでもない。

飲めば相当いける口なのだが、なければないですむという便利なタイプなのである。

若いマダムのキキに惚れているわけでもない。彼には江草千夏という、れっきとした恋人がいる。

〈安いからだろうか〉

一郎は先月のネスパの払いを頭の中に思い浮べた。あの勘定は、たしかに安過ぎた。ネスパは、彼のような若いサラリーマンが通う店としては、決して身分相当の酒場ではない。

もちろん、銀座あたりの高級バーとは比較にならないが、それでも新宿や渋谷の若者むけマンモス・バーよりは高い店なのだ。

先月の払いは、およそ彼の基本給の二分の一ほどの額に達していた。それも、彼が予想していた額より、かなり安くなっていての話である。

〈今日はまっすぐ帰ろう〉

一郎は新宿御苑前の駅のホームを動き出した地下鉄の震動の中で考えた。考えながら、ふとその決心に逆らうものが体の奥深いところでうごめいているのを感じた。

さっきから無理におさえつけていたそのどす黒いものが、また頭をもたげて赤い舌をチロチロさせている。

それは今日の午後、会社で目覚めた突然の殺意の衝動だった。あの森川副部長のたっぷり脂肪のついた下腹部に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高倉健が映画の中で振り回すような白鞘の日本刀をつきつけるシーンを、彼は午後中おもい描いていたのである。
黙ってぶった斬るのではつまらない。副部長の上に馬乗りになって、上から顔をじっとみつめ、抑揚のない声でぶすっと一言、
「よどざんすね」
よどざんすね、よどざんすね、と、小声でぶつぶつ呟いている一郎を、向いに坐っている佐江恵子が不思議そうにみつめていたようだ。いま彼はふとその事を思い出したのである。
「よどざんすね」
「え？」
満員の人波で、さっきからぐいぐい一郎の胸もとに柔らかい体を押しつけられていた目の前の娘が、目をあげて彼をみつめた。一郎が何か誘いかけたと誤解したらしかった。
気がついてみると、その若い女の下半身は一郎の体にぴったりと密着している。一郎を見上げた目は、奇妙にうるんで、頬はぼうっと上気しているのだ。
一郎はあわてて目をそらせた。その時、ブレーキをきしませながら電車が新宿三丁目のホームに滑りこんだ。
その娘は美人ではないが、変に色っぽい口つきをしていた。
その唇の間からチロチロと桃色の舌の先をのぞかせながら、一郎を見あげている。一郎はどぎまぎして、肩を左右にゆすった。その娘の表情には、若い見知らぬ男に対する警戒心と好奇心が、はっきり浮んでいた。
彼女はてっきり満員の地下鉄車内で、新型のガール・ハントをしかけられたと誤解したらしい。
迷惑そうに眉根をよせながら、それでもその突き出した胸のふくらみを、隠しきれない期待で波うたせている。
電車がとまった。一郎は思わずよろめいて娘の肩を抱えこんだ。
「ごめん」
と、一郎は言った。娘は一郎の胸の中にいた。自動ドアが開くと、二人はあっという間もなく、ホームに押し出された。娘は髪をかきあげながら一郎を見あげる。
〈わたしをどうする気？〉
というような目つきだった。
〈しかたがない〉
と一郎は思った。
〈こうなったらしかたがない〉
この辺が風見一郎という青年のおかしな所である。何もしかたがない事など、ありはしないのだ。娘が彼をどう誤解しようと、一郎の側に責任はない。
いや、〈責任〉などという考え方は、風見一郎という青年の頭の中に、どう探したって見つかりっこはないのである。

したいからする。
したくないからしない。
それが彼の、つまり昭和二十年八月十五日、にっぽん国が明治維新以来はじめて戦争に負けた日に生れた、純正戦後っ子である風見一郎の一貫した姿勢であった。
高遠な理想や、人の道などには関係ない。英雄、偉人になる気もない。ヒューマニズムとか、階級意識とかいう観念も、言葉として知っているだけだ。
自分のことを立派な人間だなどとは金輪際おもってないが、それほど駄目な男だとも思わない。
したいからする。
したくないからしない。
今も一郎は地下鉄のホームに、変な具合に知らない娘と向きあっていた。
〈どうしよう〉
一郎は一瞬ふと迷った。その時、シュッと音をたてて電車のドアがしまった。そうなったらしかたがない。
「行く？」
と、一郎は言った。娘はだまっている。だが一郎がポケットに手をつっこんで、ふてくされたように歩きだすと、二、三歩おくれてついてきた。どうやら思いきって、この無作法な青年の誘惑につきあってみようという構えらしい。
〈行くったって、一体どこへ行くんだ？〉
伊勢丹デパートへ抜ける地下鉄の階段をのぼりながら、一郎は首をひねった。どうやら妙なことになりそうな感じだった。
地下道を出ると、街には夕暮れの気配が漂っていた。自動車の排気ガスのせいか、何だか鼻の奥がひりひりする。
「さて、と」
一郎は少し猫背の恰好で歩道の端に立ち、娘のほうをふり返った。娘はあいかわらずそっぽを向いたまま、連れとも他人ともつかぬ曖昧な風情で少しはなれた位置に立っている。
〈わりかしカッコいい子だな〉
と、一郎は思った。兎の耳のように細長い襟のついた長袖のシャツブラウスに、ちょっと大胆すぎるミニ・スカートをはいている。
ちかごろ流行っているらしい先の四角なエナメルの靴をはいて、それと同じ色のエナメルのバッグを持ち、やや内股気味に足先を揃えて立っているのだ。アキレス腱のあたりがピッと立った、白い綺麗な脚をしていた。
〈やや小柄だな〉
小鼻がつまんだようにふくらんでいる。つけまつ毛らしいが、目に翳りがあって、まあ当世風の美少女といえるだろう。難を言えば、やや開き気味の唇に、いささか猥褻な感じが漂っている点だ。もっとも、人によってはそこがい

いという向きもあるかも知れない。
「踊りに行くにはちょっと早いしな」
と、一郎は独り言のように呟いた。娘は知らぬ顔をして空を見あげている。
「酒でも飲むか」
「どこで？」
娘がはじめて口をきいた。一郎はポケットに手を突っこんだまま、彼女のそばに近づいた。
「べつに当てはないけど」
「つまらないわ。ただ飲むだけじゃ」
一郎は肩をすくめて、薄笑いしながら言った。
「じゃあ、ホテルへ行くか」
「ありきたりの所はいやよ」
「へえ」
一郎はハイライトの袋をとりだして一本口にくわえると、「回転ベッドとか、鏡天井とかいう、例のやつに関心があるのか」
「そんなの」
娘は顎をしゃくって不敵な笑い方をした。
「大阪や神戸に行けば、もっと凄いのがあるわ」
「じゃあ、そっちに行きゃいいだろ」
一郎は煙草を手の中で握りつぶして、あばよ、といったふうに片手をあげ、彼女のそばを離れようとした。娘の小生意気な口調に、むっとしたのだった。
「逃げるの」
と、娘が言った。
「逃げやしない。おたく向きじゃないってことさ、おれは」
「それでも男か」
と、娘は奇妙な男言葉を吐いた。
「きん玉あるのか、おまえ」
それは決して下品にはきこえない、むしろひどく可愛らしくさえある口調だった。だが一郎はその言葉を聞いた瞬間、かっと頭に血がのぼって立ち止った。その日、社で同じ言葉を吐いた森川副部長の二重顎が頭に浮んだ。
〈この野郎――〉
一郎はあともどりして、荒々しく娘の腕をつかんだ。
「こいよ」
と、一郎は言った。「おれにきん玉があるかないか、じっくり見せてやる」
一郎にしてはめずらしい事だった。いつもなら、細い目をぱちぱちさせて、例の放心したような、ぼんやりした顔でその場をはなれて行っただろう。
それが今日は少しちがった。午後、会社で森川副部長が怒鳴ったのと同じ文句を、その小娘が吐いたためだった。
〈殺してやろうか〉
と、思ったほど頭にきていた怒りが、ここにいたって表

面に噴きだしてしまったのである。
「痛いじゃないの」
と、娘は叫んだ。
「いいからこい」
一郎は、ちょうど空車の札をたてて走ってきたタクシーを止めると、引きずるようにして娘を車内に押しこんだ。
「池袋へやってくれ」
「どこへ行くの？」
娘がきいた。さっきまでの元気はどこへやら、おびえたような声の調子だった。
「くればわかる」
「ホテル？」
「ああ」
「本当に行くの？」
「行く」
「どんなホテル？」
「ジャングル苑ってとこだ。名前ぐらい知ってるだろう。有名な連れこみホテルだから」
娘がごくりと唾をのみこむのがわかった。
「聞いたことないけど——」
「天井と床がガラス張りになってる。室内には熱帯植物が生い茂り、インコや小鳥が放し飼いになってるんだ。ガラス張りの床下には食肉魚のピラニヤや、ワニの子供が泳いでいるし、天井には錦ヘビの本物がとぐろを巻いている。ベッドの下に大きなカメがもぐりこんでいることもある。花びんの中にはサソリが入っている部屋もあるそうだ」
「……」
「ありきたりの趣向に飽きたアベックが、そこで原始人のセックスを楽しむという寸法さ。刺戟が強くて、すごくいいらしい」
娘はしばらく黙っていた。一郎も知らん顔をしていた。ジャングル苑の話は、嘘ではない。錦ヘビやワニも、小型の可愛いくらいのものだが、結構それらしきムードはあるホテルなのだ。一度、江草千夏に内緒で女の子と行ったことがある。玄関ロビーに、チンパンジーがいて、愛嬌をふりまいていた。
車は薄紫色の夜気が漂いはじめた新宿の街を抜けて、戸塚方面にむけて走っている。
一郎の内部で、森川副部長への黒い殺意が少しずつ変色してくるのがわかる。灰色になり、しだいに赤味をおびて、やがてクラゲのような桃色の塊になってきた。
〈殺す〉という文字が頭の中で点滅して、ぱっと消えると、かわりに〈犯す〉というランプがついた。
〈この娘を犯す〉
一郎の頭の中で青白い光がスパークした。
「池袋はどの辺ですか」

「西口へやってくれ」
一郎は運転手に言った。
〈おれは怒っているんだ〉
と、彼は心の中で呟いた。森川副部長のことだけではない。この小生意気な娘のことでもない。
何といってはっきりしない、得体の知れないもやもやが彼を圧しつぶそうとかかっている。そうなのだ。それに対して怒っているのだ。
〈だからおれはこの娘を犯す〉
理由にならない理由だ、と一郎は自分で思った。大体、したいことをするのに理由や動機などいるものか。
〈犯したいから犯す。それだけだ〉
一郎の言葉にならない自分との対話を、肌で感じ取ったように娘が体を引いた。そして不意に両手で胸のあたりをおおうと、一郎を見あげた。
「心配するなよ。車の中で取って食おうってわけじゃない」
一郎は言った。娘はガラス玉のような目を見張って彼をみつめ続けている。
「この辺ですか」
しばらくして運転手がきいた。
「もう少し先だ。ほら、あの赤い広告塔のビルの横を入ってくれ」
運転手が荒っぽくハンドルを切る。
「ここだ」
商店街から少し入った大きなビルの陰にあるホテルだった。〈ジャングル苑〉というネオンが毒々しい色に夜空を染めている。玄関のあたりは、ゴムの木やシュロの鉢植が並べられて、暗い翳をつくっていた。
「降りろよ」
一郎は料金を払うと、娘の柔らかな二の腕をつかんで引きずりおろした。
「どうした。ついてこいよ」
娘はべそをかいたような表情でホテルの前に突っ立っている。
「こいったら、くるんだ」
一郎は娘のバッグをひったくった。その時、彼も予期しなかった事態がおこった。
娘が突然、赤ん坊のように顔をくしゃくしゃに歪めると、わっと大声で泣き出したのである。呆れるような声量だった。
両手のこぶしを胸の前で握り合せて、雀の子のように口を精一杯ひろげ、あたりかまわぬソプラノで泣きわめくのである。
「よせ、ばか！」
一郎は娘の思いがけない不意打ちに虚をつかれて、一瞬、動揺した。だいいち、カッコわるいことおびただしい。一

郎はあわててバッグを娘の手に持たせ、その大きな口を片手でふさぐようにして娘の肩を押しやった。あたりを見回すと、買物帰りらしい中年の婦人と、その連れらしい娘が、おびえたように体を寄せあってこちらをうかがっている。

「泣くのはやめろ！」

一郎は娘の手を引いてビルの表通りへ駆け出した。ちょうど客をおろしたタクシーが目の前でドアを開けて止っている。

「新宿！」

娘を車の中へ押しこむと、一郎は、ああカッコわるい、と走り出した車のルーム・ミラーをのぞきこんで慨嘆した。

娘はまだ泣きじゃくっている。

「もうよせ」

一郎はいらいらした声でどなった。

娘は二、三度しゃくりあげると、ごくりと唾をのみこんで泣きやんだ。

「名前は？」

一郎がきいた。

「マリ。古賀マリ」

と、娘は答えた。「ペンネームだけど」

「へえ。ペンネームねえ。イラストでもやってるのか」

「カラムニストよ」

「なんだって？」

「ほら、週刊誌や新聞に風俗時評やゴシップや、いろんな囲みの文章がのってるじゃない。あれを書く仕事よ。カラムニスト」

「コラムニストだろ。あんまり気取った発音するからわかんなくなるんだ。雑文屋でいいじゃねえか。もっとも、お前さんが文章書いてるなんて信じないがね、おれは」

マリと名乗った娘は、黙ってハンドバッグの中から雑誌の切り抜きを洗濯ばさみで留めたのを取りだした。

「嘘じゃないわ。ほら」

古賀マリ、と九ポのゴシック活字の署名入り記事を、一郎は手に取って眺めた。

〈フリー・セックス時代のマナー〉と見出しがつけられた二十行ほどの埋草記事だった。一郎は首を振って、外の記事をめくった。〈パンタロンの脱ぎ方、脱がせ方〉〈軟派全学連の性意識〉〈今年の夏のハント作戦〉〈共同幻想としてのONAN〉〈ベッドでゲバろう〉

「何だい、こりゃあ」

一郎は呆れ返ったような顔つきでマリを眺めた。

「何よ」

「一体いくつなんだ、お前——」

「お前って呼ぶのはやめなさい」

と、古賀マリはつけまつ毛をバタバタさせて言った。

「あたしはこれでもマスコミの最前線で働いているカラム

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com